

笑うことは素晴らしい!!

落語と出会って

近藤英子

桂三枝（現文枝）が五十年に亘って務めてきたテレビ人気番組「新婚さんいらっしゃい」の司会を勇退した。

その三枝の創作落語を連日のようにきいている。近くの図書館にずらりと並んでいるのをみつけた。一二五撰とあるから膨大な量だ。早速CDを借りてきいてみたが、古典に比べて身近な題材だけに非常に親しみやすい。音声を頼りに想像力をふくらませてゆく。

ひとつ紹介してみると、ゴルフ場が舞台。老女がキャディーを勤める話だった。数人の人物のやりとり思わず手をたたいて大笑い。広いゴルフ場で耳の遠い老女に大きな声で叫んだり、ショット前の緊張の眩き声など細かいところまで情景が浮かぶ。実にわかりやすく臨場感あふれる。ストレッチをしながら、料理をしながらでも十分入ってくる。うまいなあ三枝は、声色、トーン、ただただきき入った。

私が初めて落語に興味をもったのはテレビで「柳家小三治 コロナ禍と闘う」をみたときだ。スピード昇進、人間国宝、そして病を得ての高座での芸、人物に成りきることへの執念、人間のおかしみを追求しつづけた小三治の姿に打たれる。なかでも仙台にいた幼い頃、母に捨てられた無念を語る噺家を見て、「なんで捨てるんよ！」と怒りと不憫で激しく泣いたのを思い返す。放送から数ヶ月後、小三治は天に召された。「一生懸命やれたときは嬉しいね」。哀しみを堪えた笑顔から喜びが伝わってくる。

落語といえば脳裏に浮かんでくるのはひとりの女性との出会いである。

八年前、当時指導を受けていたチェロの先生のコンサートを菅屋の小ホールで開かれた。ピアニストの奥さんとのデュオの演奏会だった。

終了後、茶話会で隣に座った五十代後半の女性が話しかけてきた。音楽を聴きに来ているからには音楽のことで話が弾むのかと思いきや、その女性は寄席通いが大好きだ、とワクワクした表情で言った。ナンバや梅田のグランド花月、繁昌亭へ度々出かけていると知って寄席にはほとんど関心がなかった私は少なからず驚いた。彼女のスーツを素敵に着こなした凛とした佇いと寄席が、私の中でなかなか結びつかず次の言葉が出る迄に時間がかかった。

「何かきっかけがありました？」

「以前姑と同居していました、腹が立ったりいらつくことがよくありました。あの頃はラジオが私の心の友だったんです。音楽あり、トークあり、短篇小説ありとしょっちゅうきいたものです。ある日落語が流れてきたんです。噺家の名前も憶えていませんが……胸の奥にすーっと入ってきて笑いが救ってくれました。そのうち生できいてみたいとナンバや梅田に通うようになりました。」

落語愛好家は感慨深げに話してくれた。彼女の熱い語り口に対して、私は素っ気ない受け答えをしたのであろうと八年を経て思い起こしている。今だったら話が大きいに盛り上がったことだろう。

是非生の落語をきいてみたいものだと思つた。宝塚のホールへ出かけた。初めてみる芸は顔の表情、身振り、手振りを楽しめるので本当に面白い。よく笑った。お客さんのなかにずーっと笑い続けている人がいたがわかる気がする。五人の噺をきいた。要約してノートに記してみた。五つの物語がそれぞれのシーンと共にくっきりとうつり動いてゆく。

「ガッテン流」に言えば、毎日笑う人と全く笑わない人では身体の数値に違いがみられるはずである。カルチャーセンターなどでも「笑い」の講座があるほどだ。

―落語とのかしかな出会いに感謝した。